

2022年8月31日（水）

老球の細道686号

## 8月の言葉

バスケットボールコーチ 室井 富仁

孫たちの長い夏休みと共に過ごした1か月だった。コロナが「シェーン！カムバック」ではないがまたもやりカバリーして来た。おかげさまでバスケットのクリニックも激減。

充実感に欠ける夏休みになると思いきや、二つの達成感と一つの希望を味わうことができた。孫と共に日常化した虫捕りで究極のスキルを習得した。宮本武蔵の箸によるハエつかみまではいかないが、飛行中のシオカラトンボを虫捕り網でゲット。孫の私を見る目が変わった。もう一つは6月から読んでいたノーベル賞作品ソルジェーニツイン『煉獄のなかで』を遂に読破した。そして希望は、創始者が会津出身である仙台育英野球が白河の関を越えた。次は会津地区のバスケットボールが滝沢峠を越えることである。

### 2・読書から

◆「終わりを慎むこと初めの如くす、必ず事を取る無し」〈柳田聖山著『人類の知的遺産・ダルマ』講談社〉：老子の言葉だという。物事は何事も慣れてくると習熟というメリットもあるが、惰性と言うデメリットにも陥りやすい。終わりも始めの新鮮な気持ちで締める。

◆「ネルジンが若い頃から何より恐れていたのは日常生活の泥にはまり込んでしまうことであった。ことわざにも言っている通り“人の溺れるのは大海よりむしろ水たまり”なのだ」〈ソルジェーニツイン著『煉獄のなかで』集英社・世界文学全集〉：毎日をいかに新鮮な気持ちで生き抜くか。私も老いてますます充実した日常をもちたい。励まなければならない。

◆「子どもは大人が言っていることではなく大人がしていることから学ぶ」〈『スポーツジャパン』：岸見一郎〉：子どもの頃を振り返る。尊敬できる人の話しか聞かなかった。尊敬できる人とは、自慢しない人、誠実な人、口先だけでなく行動する人。

### 3・新聞、パンフレット等から

◆「痛みは“見せず、言わず、悟られず”淡々と日常のことをこなしていた方が楽になることもあるのです」〈朝日：リレーおびにおん〉：腰が良くなったら今度は股関節、そして今は足の脛。「あっちイテー、こっちイテー」の嵐。自分で耐え、周囲に感染させてはいけない。

◆「才能はないとすぐに分かりましたけど、努力することはできたんです」〈朝日：折々のことば：永瀬拓矢〉：神童でなかった将棋義士の言葉。才能はなくとも好きであれば努力は続けられる。そして努力を続ける者が最後に勝つ。タレントのいないチームにも伝えたい。

◆「戦争が置き去りにした人々の間の溝を埋められるのは文化だけだ。憎しみは病気であり、文化がその治療薬なのだ」〈朝日：オピニオン&フォーラム2〉：ロシアの作家が今回のウクライナ戦争に対して言った。憎しみの毒を消せるのは真の文学だという。スポーツも同じ。

◆「もっと平気で切実であるべきだ」〈朝日：折々のことば：岡本太郎〉：才能がないと思いつくことからくる「どうせ無理！」の呪い。岡本は「いかに才能に頼らない仕事をするか」と自分を追い込んで仕事をしてきたという。努力も遊びも徹底することか。